

休日の飼育：保護者の飼育応援団の構築と成果について

竜田孝則



1 大問題発生

晴天の霹靂とはこのことを言うのであろう、ある保護者からの思ってもいなかった話に信じられない思いで聞き入っていた。

脊髄損傷のため動けなくなったウサギと、片目をえぐられて瀕死の状態になったウサギを、飼育委員をしていたご自分のお子さんが自宅へ連れ帰って看護したが、2羽とも相次いで苦しみながら死んでいったことや、当時、ウサギとアヒルを同じところで飼っていたため、ウサギの赤ちゃんがアヒルに食べられてしまったことなどを話された。そして、飼育状況はその当時と比較しても改善されているとは思えないので早急に改善をお願いしたいとのことであった。

当時の担当者に話をきいてみると、飼育舎の改修工事の際、仮の飼育小屋が狭かったため、そのような事故があったように思うとのことであったが、数年前のことでもあり前後関係などがはっきりとしなかった。

お世話になっている動物病院に確かめたところ、確かに大けがをしたウサギ2羽を子どもたちが病院につれてきたこと、ウサギは手当のかいなく2羽とも相次いで死んでしまったことなどお話くださった。

このことだけでも、当時の飼育に疑問を投げかけられても仕方のないことであると思われた。しかし、現在の飼育については、飼育委員の子どもたちは意欲的であり、飼育小屋を見てもウサギと烏骨鶏が広々としたところで仲良く餌を食べているようで、一体どこが悪いのかよく分からず、担当者と顔を見合わせて途方にくれるばかりであった。

2 公開質問状

解決の糸口も見つからないうちに夏休みが近づいていた。飼育については、飼育委員に当番を忘れないように、そして、動物がけがをしたり病気になっているようであれば、先生に早めに言ってほしいことなどを指導した。

土・日の飼育については日直代行員の方に、当番を忘れて子どもたちが来ないようにであれば、代わりに水と餌をやっておいてほしいことなどをお願いした。

一方、このころ不審者の出没が相次いで報告されており、夏休み中の飼育当番について一抹の不安を抱いていた。

また、保護者の方からは、夏休み中に飼育のお手伝いをさせてほしいという申し出を受けていたが、飼育担当の職員や児童には、あまり外部から口を出されたくないという思いがあり、板挟みになり困っていた。

しかし、長期休業中の土日の飼育については、どうしても不審者などで不安があるということから、職員や児童を説得してお手伝いをお願いすることとした。

夏休み明けに保護者から公開質問状がよせられた。

これまでも、餌の直まきは不衛生ではないか。動物病院との連携がとれているのか。地下に巣穴があり不衛生ではないか。飼育頭数が多すぎてめんどうをみきれてないのではないか。雌雄が分けられていないのではないか。病気やけがでこれまで多くのウサギが死んでいるが、これで生命尊重が教えられるのか、などの質問がよせられていたが、学校側の対応に不安を抱かれたのだろうか、これまでの

疑問点をまとめてよせられたのであった。

学校としては、とにかく自分たちにできることを、可能な速度で着実に、そして誠実にやっていくしかない。このことで非難されても仕方がない。非難は甘んじて受けよう。全責任は校長がとる、ということを職員には話した。

3 助け船

たかがウサギ、されどウサギで学校中で頭を抱えていたとき、願ってもない助け船があった。

中川先生であった。先生のお申し出は「生まれてしまった子ウサギの里親をさがしてあげましょう。とにかく3羽くらいなら引き受けられます」とのありがたいものであった。おまけに、雄ウサギの去勢も学校の近くの動物病院に働きかけてくださるという、ありがたいお話であった。おそらく保護者が「学校飼育動物を考えるページ」を通じて本校の飼育の実態を詳細にお伝えしていたのであろう、事情はよくご存じであった。

早速このお話をもとに職員会議で飼育についての具体的な方針を次のように提案をし、様々な議論はあったが、このとおり決定された。

- (1) 子ウサギを里子に出す。
- (2) 親ウサギについては他校やPTA、地域にも呼びかけて里親探しをする。
- (3) 雄の去勢手術をする。
- (4) 飼育小屋の土の量を減らして、ウサギが巣穴を掘れない状態にし、そのかわりに巣箱を設置する。
- (5) 烏骨鶏とウサギを分けて飼育できるよう、飼育小屋の割り振りを検討する。
- (6) 学校が休みのとき、保護者からボランティアを募り、応援してもらう。

特に議論があったのが、(6)の保護者ボランティアであった。職員には外部に頼らず自分たちだけで乗り切りたいという思いが強く、最後まで抵抗していた、しかし、一昔前とは桁違いに減ってしまった職員数と増えてしまった業務のことを冷静になって考えると、職員だけで乗り切ることは相当な無理をしなければならないという事実を前に、最終的にはボランティアをお願いすることとなった。

4 子どもたちの抵抗

しかし、思いもしない抵抗があった。飼育委員の子どもたちである。

「ぼくたちは一生懸命に飼育しているのに、親が手伝うのは色々と文句を言われているようでいやだし、子ウサギも可愛いからよそへやりたくない。親ウサギもこれ以上少なくなったら寂しくなるので、どこへもやりたくない」というのである。

説得には本当に苦労した。

飼育の方法については、このままではウサギも長生きできないこと。飼育頭数については、数が多すぎて、けがをしても、どのウサギがけがしたのかわからないことなどを例にあげて根気よく説得したが、承諾は得られなかった。

子どもたちは、わたしが飼育小屋に入ると、ウサギをその場限りの適当な名前と呼んでみせては、個体識別ができていることを盛んにアピールする。そんなその場しのぎをしてまでウサギを残しておきたい心情はよく分かったが、やはりどう考えても多すぎる。ゆとりをもって、飼育を楽しむという状況にはほど遠いことは、子どもたち自身が身にしみて一番よく知っていることである。

子どもたちが納得できなければ強行はできない。子どもたち自身が飼育の現実としっかり向き合って、折り合いをつけていくのを待つしかないのである。どんなに対応が遅いと非難されようが甘んじて受けるしかない。

ある日、飼育小屋の掃除を手伝っていると6年生の男の子がぼつんと言った。

「先生。このウサギ誰かの家で飼ってもらえると幸せになるかなあ」

その言葉をきっかけに、かたくなに里子に出すことに反対していた子どもたちの心がとけていった。

中川先生のところに連れて行くウサギが選び出された。

学校が休みのときの飼育の応援についても承諾した。

問題は一気に解決に向かって動き出したのであった。

5 飼育応援団誕生

11月のPTAの運営委員会の席上で飼育応援団は誕生した。保護者からこれまでの経緯をまとめた資料が出され、休日の飼育を応援するということから「飼育応援団」という



名称でボランティアを募集することが決定された。

飼育応援団には約40世帯の登録があった。登録したきっかけをアンケートからさぐってみると、

- (1) 子どもとのコミュニケーションを大切にした と思う今、飼育応援団の活動は、とても良い 機会を与えていただいていると思います。
- (2) P T A活動に参加できないでいましたが飼育 応援団が土日なので、これならできると早速 申し込みました。
- (3) 自宅がマンションで動物を飼えないので、子どもに動物とのふれあいを体験させたいと思って。

という三つのパターンに分かれていた。

6 宿命的な課題

保護者の協力で誕生した飼育応援団は宿命的に大きな課題を抱えていた。

創立時には飼育応援団の立ち上げに関わったメンバーが活動日の割り振り、メンバーの組み合わせ、活動内容の伝達など、飼育応援団の運営を積極的に行い、運営に何の不安もなかった。

しかし、学校には卒業がある。卒業によるメンバーの入れ替えは宿命的な課題である。中心となる人材がいなくなったとき、どうするかである。創立メンバーも同じことを考えており、卒業する前に次の人材をスカウトし、きちんとした引き継ぎがされていた。大きな課題と考えていたメンバーの入れ替えは、幸いにも杞憂に終わった。

しかも、大きな課題は意外なことに、大きな展開をみせ、新しい事実を作り出すことにつながった。

飼育応援団の活動に刺激され、新しい学校支援組織が次々に誕生したのである。

「学校をきれいにし隊」「子どもの安全を見守り隊」「読み聞かせ」「図書整理」「学習支援」など学校のあらゆる場面に保護者や地域の方、教員志望の大学生の活動がみられ



るようになったのである。

飼育応援団の誕生が、閉ざされていた学校を開き、学校が開かれたことによって、新たな支援組織が誕生し、新たな支援組織が新たな人材を呼び込んだのであった。

学校支援活動の活性化が、課題解決の鍵となった。

7 最後の課題

本校のウサギの年齢は推定7歳が5羽、4歳が2羽である。ウコッケイはさらに長寿で推定9歳とのことである。チャボは少なくとも4歳以上であることは確かだ。

このように本校の飼育動物はウコッケイを筆頭に高齢化が進んでいる。

最高齢のウコッケイはほとんど動けず、口元まで水や餌を運んでやっている。夕方には、寝床まで運んでやっている。

高齢化した動物を最後まで看取ってやるというのも、子どもにとっては必要なことなのかもしれないが、余生は里親のもとでゆつくりと過ごさせてやりたいとも思うが、どうだろうか。

(鎌倉市立大船小学校 鎌倉市大船2-8-1)